研究経過報告書

令和５年 10 月 16 日

研　究　員 （留学者）	所属　体育学部　　職　教授　　氏名　　田原淳子
派 遣 期 間	令和５年４月１日　～　令和５年９月３０日
研究主題等	国際社会における日本のオリンピックムーブメントに関する 歴史的研究
報 告 事 項	（研究活動の概要、内容、成果等、添付書類の見出し等） **1．研究活動の概要** 本研究の問題意識は、近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタンが提唱したオリンピズムが、大会の開催及びその過程を通じて、変化し続ける国際社会にどのような影響を与え、その中で日本がどのような役割を担ってきたのかであった。本研究の目的は、日本のオリンピックムーブメントの歩みをオリンピズムと国際政治の観点から通史的に明らかにすることである。 本研究を遂行するために、スイスのローザンヌに所在する国際オリンピック委員会（IOC）オリンピック研究センターに客員研究員として在籍し、そこを拠点にヨーロッパにおいて関係史料の収集を行なった。また、ローザンヌ滞在期間中にヨーロッパ諸国において本研究に関係する研究者を訪問し、研究に関わる情報収集や協議を行なった。 **２．研究内容と成果** **（1）収集した史料の大別** ① 近代オリンピックの通史に関わる史料 ② オリンピック競技大会（以下、大会）の招致に関わる史料 ③ 日本において招致・開催された大会に関する史料 ④ 日本選手が参加した外国で開催された大会に関する史料 ⑤ IOC会長に関する史料 ⑥ 日本オリンピック委員会に関する史料

報告事項	⑦ 日本のIOC委員に関する史料 ⑧ その他、日本で招致・開催された大会に重要な役割を果たした人物に関する史料 ⑨ オリンピック競技の国際競技連盟（IFs）に関する史料 ⑩ 現在のIOCにおけるオリンピックムーブメント戦略に関する情報・資料 ⑪ 関係する文献の収集 **（2）研究協議について** ① IOCオリンピック研究センター 着任初期に受入れ担当者と本研究内容について協議を行い、現在のIOCにおけるオリンピックムーブメント戦略を把握した上で歴史研究を遂行すれば、現代的な視点から史実を把握・考察することができるとの助言を得た。そして現行のテーマ別の戦略についての資料の紹介を受けた。この観点は、本研究がオリンピズムを基点として史実を発掘し考察するという立場にあることに鑑み大変有益な助言であった。また、同氏の紹介により、報告者が面識のなかったオリンピズムに関わる研究者を訪問し、研究協議が実現したことも大変有意義であった。 ②ドイツの研究者との協議 これまでにも研究交流のあったドイツの研究者とは、３つの研究テーマについて、機会をとらえて３回にわたり研究協議を行なった。 一つには、ドイツにおける前回の在外研究の際に開始した共同プロジェクト（第二次世界大戦後における日本とドイツの国際スポーツ界への復活過程）の進捗状況について確認し、そこから展開可能な横断的研究課題と縦断的研究課題について相互にアイデアを出し合い、協議した。 二つ目は、大会の開催を機に大会の枠を超えて開催国について報じられた記事内容（政治、経済、文化、国民性など）の比較・分析である。大会の開催国であった日本についての諸外国における報道と、日本が海外の参加国について報じた内容を考察する。このテーマは、大会が開催国の理解や国家間の相互理解に果たした役割の一端を明らかにするものである。 三つ目は、ピエール・ド・クーベルタンによる日本の理解とイメージに関する検討である。クーベルタンに、日本についてのイメージの構築に影響を与えたと考えられる嘉納治五郎など、クーベルタンと直接接触があった人物についても併せて考察する。 ③オランダの研究者との協議 オランダオリンピック委員会の紹介によるスポーツ史家・ジャーナリストとの出会いにより、大会（ここでは1928年アムステル

	ダム大会）の開催による国内外へのインパクトという当初想定していたテーマを超えて、同大会に参加した嘉納治五郎を団長とした日本選手団の現地での交流に、新たな研究の展望が開けた。同大会では、財政上の理由からオリンピック村が設置されなかったことが、選手らと現地の人々との接触を容易にしたという背景があり、国際交流がまだ珍しかった時代に、現地の新聞は日本人のことを隈なく報じていたことがわかった。 　また、ハンガリーとオランダによる同大会に向けたフェンシングを通じたスポーツ外交や、飛行機がなかった時代に巨大な駐車場を用意するため、今日世界中で一般に使用されている駐車場を示す標識Ⓟが誕生したことなど、興味深い逸話をたくさん聞くことができた。 　オランダにとって、1964年東京大会はアントン・ヘーシングが柔道で金メダルを獲得した特別な大会であり、オランダで多数の報道がなされたとの情報から、同大会についても継続的な研究交流を行うことになった。 　④ノルウェーの研究者との協議 　ノルウェースポーツ科学大学のスポーツ史担当教授との面談により、1952年オスロ冬季オリンピックに関する研究の情報を得たほか、ノルウェー国立図書館のデータベースの使用方法のガイダンスを受けた。 　また、同大学のスポーツ哲学担当教授との面談では、フェアプレーとオリンピズムに関する多数の有益な文献情報を得たほか、戦争が大会参加に及ぼした影響等について同氏の深い洞察を聞くことができた。ノルウェーから見たドイツと日本という地政学的歴史的に異なる条件のもとでは、両国の選手に対する大会開催国の国民の反応に違いが見られたことは興味深かった。 　スポーツとジェンダーに関しては、若手研究者との研究交流のほか、ノルウェーオリンピック・パラリンピック委員会スポーツ連合を訪問し、スポーツにおけるセクシュアルハラスメント等の人権問題への対策や最近開発された通報システムについての説明を聞き、資料を入手した。 　⑤ハンガリーにおけるインタビュー 　ブダペストで開催された国際フェアプレー委員会理事会の機会を捉え、同理事会メンバーである1964年東京大会の参加者２名に当時の印象などについてインタビューを行うことができた。フェンシングと器械体操で出場した両氏は、いずれも東京大会と日本に対し、異文化に触れて大変好印象を抱いたことがわかった。 **(3)視察** 　①ピエール・ド・クーベルタンに縁のある場所の訪問

	本在外研究によるスイス滞在期間中に、知人の案内等でクーベルタンに縁のある次の場所を訪問し、当時の様子に想いを馳せることができた。 スイス：クーベルタンが第一次世界大戦中の1915年にパリからローザンヌにIOC本部を移転した場所（カジノ）。その後、クーベルタンの在任中、40年以上にわたり、IOC本部が置かれていた建物（モン・レポ）。オリンピックコングレス（1913年、1921年）が開催された旧ローザンヌ大学の建物（現在は博物館）。クーベルタンの墓。 ドイツ：クーベルタンの友人でクーベルタンに1896年第1回アテネ大会のオリンピック競技としてマラソンを紹介したの人物の生家。 フランス：クーベルタンの妻マリー・ラタンの出身地の城跡。クーベルタン財団。クーベルタンの父（画家）が描いた有名な絵画「伝道者の出発（Missionaries’ departure）」(1868年)が飾られているエピファニー教会（The Chapel of the Epiphany）。 チェコ：オリンピックコングレス（1925年）が開催された旧市役所。 ②その他の訪問先（大学等） 研究の拠点を置いたIOCオリンピック研究センター以外に、次に示す大学等を訪問し、研究者らと情報交換などを行い、有益な知見を得ることができた。 スイス：ローザンヌ大学、マッグリンゲン連邦スポーツ大学、ベルン大学ジェンダー研究学際センター ドイツ：ドイツ・ケルンスポーツ大学 ハンガリー：ハンガリースポーツ科学大学、国際フェアプレー委員会事務局、ハンガリーオリンピック委員会 チェコ：チャールズ大学 ノルウェー：ノルウェースポーツ科学大学、ノルウェーオリンピック・パラリンピックスポーツ連合 フランス：クーベルタン財団、2024 年パリ大会会場等 **（4）新たな研究の方向性と可能性** ①日本選手団の他国における交流 当初は、日本で招致・開催された大会に焦点化して史料の収集を進めていたが、それぞれの時代状況の中で、諸外国で開催された大会に関わって日本選手団が現地の人々にどう受け入れられ、交流が行われたのかについても興味深い史料の発掘ができた。具体的には、前述した1928年アムステルダム大会（オランダ）に関連して、日本の選手と現地の人々との交流が行われていたことがわかり、両国それぞれの側からの史料を比較することで、興味深

	い知見が得られると思われた。また、第二次大戦の影響により、日本が招待されなかった1948年ロンドン大会の次の大会に当たる1952年オスロ冬季大会（ノルウェー）についても、興味深い研究の手がかりを得ることができた。 ②現地語による史料の解読 現地で収集することができる史料は、通常、現地の言語で記述されているため、以前は国によっては史料の解読が困難であるという理由で研究対象から外してしまうことが多かった。しかし、今回の現地訪問により入手することができた史料は、近年急速に発達してきた機械翻訳を活用することによって、日本語で大まかな内容を把握することができるほか、現地語と比較的近いドイツ語や英語などの言語に翻訳することで、理解が容易になるという手がかりを得た。さらに重要なのは、現地の協力者を得られたことで、史料の内容に関する問合せや史料解釈に関する意見交換を行うことが可能になった点である。 ③日本で開催された大会に出場した外国人へのインタビュー ブダペストにおいて1964年東京大会に出場した人々にインタビューを行った経験から、日本で開催された大会に出場した外国人の選手や関係者などの声を集めることは貴重な歴史の証言になると思われた。 **（5）その他** 本研究の遂行の他に、滞在期間中に以下の経験をすることができた。 ① 共同プロジェクトにおける原稿執筆のための協議 IOCオリンピック研究センター、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会、フランスピエール・ド・クーベルタン委員会の３者による共同プロジェクトで進められている、クーベルタンに関するリファレンス（参考資料、計60項目）の分担執筆に関わる中で、複数回にわたり編集担当者と対面による協議ができたことは有意義で貴重な学びになった。同リファレンスは2023年11月にIOCのウェブサイトで公開予定である。 ② IOCにおけるオリンピックデー等の行事への参加 IOCが授与するクーベルタン賞の授賞式及びIOC創設日を記念するオリンピックデー（6月23日）関連イベントへの参加、国際フェアプレー委員会主催の2020東京大会及び2022北京冬季大会を対象とした国際フェアプレー賞の授賞式に理事として参加（写真添付）、オリンピックミュージアム設立30周年記念行事への参加。 ③ 国際体育・スポーツ史学会大会（ISHPES Conference 2023）への参加 ローザンヌ大学で開催された体育・スポーツ史に関する国際学

	会大会に参加し、数多くの研究発表に触れ、有意義な研究交流を行うことができた。また、会議終了後にソーシャルプログラムとして行われた大学近隣のスポーツの名所視察ウォーキングに参加したことから、その企画者との交流が始まり、2024年6月にスイスで開催される山と登山に関する国際シンポジウムに、野外活動と山に詳しい本学卒業生を紹介することができた。 ④ 本学大学院生・卒業生への研究サポート スイス滞在期間中に本学でオリンピック史の研究を行っている大学院生（博士課程）と現在オーストリアの大学院（修士課程）で修学し、スポーツと教育に関するイベントマネージメントを研究している本学の卒業生の研究サポートをそれぞれ行った。本学関係者のIOCオリンピック研究センターにおける史料収集や文献の検索・収集、研究相談に応じることができたことも嬉しいことであった。 ⑤ ジムナストラーダ2023（世界体操祭）の視察 オランダのアムステルダムで開催されたジムナストラーダ2023（世界体操祭）を訪れ、本学から出場していた男子新体操部の監督や学生たちと合流した。本学のチームは国際的にも大変人気が高く、そのパフォーマンスには毎回大勢の観客が集まり、大歓声と拍手喝采、スタンディングオベーションが湧き上がり、学内関係者として誇らしく思った。 ⑥ IOCオリンピック研究センター（OSC）長との面談 OSC長との面談を通して、同センターの多岐にわたる機能についての情報を得た。同センターは30人のスタッフで運営され、図書や文書類の保管・管理・デジタル化、問合せへの対応のほか、他機関との共同プロジェクトや支援活動も多数手がけている。印象的だったのは、同センターがIOCのシンクタンクとしての機能も持ち合わせていることで、IOC会長からの諮問に対する調査や答申を行っているとのことであった。こうした資料の公開が可能になれば、興味深い研究対象になりうると思われる。 ⑦ クーベルタンのドキュメンタリー映画のインタビュー対応 OSC長の紹介で、フランスの映画会社によるピエール・ド・クーベルタンに関する映画撮影があり、フランスの女性オリンピアン（フェンシング）との対談の撮影に応じた。同映画はパリ大会前に公開される予定である。 ⑧ スイスの文化や食の体験 現地の知人の紹介で知り合ったスイス人の元IOC職員とその家族との交流を通して、スイスの伝統的な料理の数々や、山歩き、伝統芸術の切り絵などに触れる機会を得た。スイスの二人の芸術家を訪問したり、学校教育について情報交換をしたりするなど、現

	地の人々の生活の一端を共有できたことは、大変貴重であった。こうした経験を通してスイスという国をより多く理解し、愛着を持つことができた。 以上、述べてきたように、在外研究による長期滞在によって、多面的な史料収集が可能になり、新たな研究の可能性を見出すことができた。また、ヨーロッパ内の研究者を訪問し、研究交流を行うことができたことで多くの生きた成果が得られた。 今後は、収集した史料をもとに少しでも多く研究を推進すると共に、この経験を学生や後進の指導に役立てていきたい。貴重な機会を与えてくださった本学に心より感謝申し上げます。

IOC オリンピック研究センターの LinkedIn（SNS）に掲載されたセンター訪問者に関する記事
写真左は、研究センター長のマリア・ボークナー氏

国際フェアプレー賞の授賞式（ローザンヌのスケートボード公園にて）

国際フェアプレー委員会（International Fair Play Committee）のウェブサイトより
http://www.fairplayinternational.org/news/olympians-receive-fair-play-awards-ioc-donates-skate-ramp-on-olympic-day